

宿題

小川未明

青空文庫

戸田は、お父さんがなくて、母親と妹と三人で、さびしく暮らしているときいていたので、賢吉は、つねに同情していました。それで、自分の読んでしまった雑誌を、

「君見るならあげよう。」と、与えたこともありました。

学校へきても、戸田のようすは、なんとなくさびしそうだった。親しい友だちもなく、いつも独りでした。運動場へ出ても、賢吉のほうから、話をしなければ、だまっているというふうでありました。遠足の日が、近づいたときでした。みんなは、集まれば、楽しそうに、その話をしていました。

「海へいったら、かにをつかまえてこよう。」と、いうものもあ

れば、

「僕は、きれいな石をたくさん拾ってくるのだ。」と、いうものもあります。

「針と糸を持って行って、魚を釣ろうかな。」

「ばか、そんなことできるもんか、生きているたこを売っているというから買ったらいいよ。」と、いったものもあります。

そんなときでも、戸田は、黙ってみんなの話（はなし）をきいていました。「君もいくだろう。」と、賢吉がいうと、戸田は、口のあたり（くち）に寂（さび）しい笑（わら）いをたたえて、うなずきました。

遠（えん）足（そく）の前（まえ）の晩（ばん）でした。賢（けん）吉（きち）はお母（かあ）さんにつれられて、明日（あす）持つていく、お菓子（かし）を買い（か）に出（で）かけました。

「キヤラメルは、一二箱あれば、いいでしょう。」と、お菓子屋
で、お母さんが、おつしやると、

「三箱、買ってよ。」と、賢吉は、いいました。

「まあ、そんなに食べられて？」と、お母さんは、お笑いになり
ました。

こんどは、果物屋の前くだものやまえにきて、

「りんごは、いくつ？」と、お母さんが、おつしやると、

「四つ買ってよ。」と、賢吉けんきちはいいました。

「そんなに持つていくの？」

お母さんは、驚おどろきなされたけれど、賢吉けんきちのいうようにしてく

ださいました。そして、お家へ帰かえつて、お弁当べんとうにお寿司すしを、こ

しらえてくだされたのです。

「お母さん、たくさん入れてよ。僕、お腹がすくのだから。」と、

賢吉は、お頼みしました。

「おまえは、どうしたんですか、いくら遠足でも、そんなに食べられるはずがないでしょう。」と、お母さんは、賢吉の顔を
ごらんになりました。

賢吉は、うそをいっては悪いと思つて、かわいそうなお友だちに分けてやるのだと答えると、お母さんは、喜んで賢吉のいうようにしてくださいました。しかし、戸田は、ついに遠足にこなかつたのです。

ある日のことでした。算術の時間に、先生は、戸田が、

宿題しゅくだいをしてこなかったの、たいそうおしかりになりました。

「おまえには、新あたらしい問題もんだいをやらない。」と、いつて宿題しゅくだい

の刷すつてある紙かみをお渡わたしになりませんでした。そのうちに、暑しよち

中休ゆうきゆうか暇ひとなりました。ある暑あつい日の午後ごごのこと、賢吉けんきちの父ちち

親おやは、外そとから汗あせをふきながらもどりました。

「いま、彼方むこうの田圃道たんぼみちを歩あるいてくると、ひきがえるが、かまき

りをのもうとしていた。」と、話はなされました。

「それから、どうした？」と、賢吉けんきちは、目めをまるくして、きき

ました。

「かまきりも大おおきいから、かまを振ふり上あげて、横目よこめで、じつとひ

きがえるを見みていたぞ。」と、お父とうさんは、答こたえました。

「お父さんは、なんで助けてやらなかったの。」

「かまきりだって、小さな虫を食べて、生きているのだもの。」

「だって、かわいいそうじゃないか。」と、賢吉は、お父さんに、

怒りました。そして、その場所をきくと、すぐ自転車に飛び乗って走りまわりました。

雲のない空に、日が輝いて、草の葉先がちかちかと光つています。彼は、すぐ川のところへ出ました。お父さんから聞いた場所を、よく探しても、かまきりもいなければ、ひきがえるも見つかりませんでした。

「どうしたのだろうな、もう食べて、どこかへいつてしまったのだろうか。」と、草を踏み分けると、いろいろのほかの虫が飛び

出だしました。賢けんきち吉は、はじめて自分じぶんのめめしかつたのがわかつたような気きがしたのです。

「なにしているの？」

だれか声こえをかけたので、見みると、夕刊ゆうかんを配達はいたつしている戸田とだでした。戸田とだの顔かおは、汗あせと元氣げんきに光ひかつて、いきいきとしていました。賢けんきち吉は、なつかしげに彼かれのそばへ寄よると、

「僕ぼく、宿題しゅくだいでわからないところがあから、聞ききにいつてもいい？」と、戸田とだが、いいました。

「いいとも、先生せんせいは、君きみの働はたらいているのを知らしないのだよ。」
賢けんきち吉は、家うちへ帰かえつてお父とうさんにそのことを話はなすと、

「その子このほうほうが、おまえよりよほど強つよいのだぞ。」と、お父とうさ

んは、戸^と田^だをおほめになりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「小学四年生」

1938（昭和13）年8月号

初出：「小学四年生」

1938（昭和13）年8月号

※表題は底本では、「宿題《しゆくだい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年5月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宿題

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>